

〔特集〕

中日の懸け橋をめざす「働・学・研」協同の生き方と挑戦

程 遠 紅

名古屋学院大学大学院経済経営研究科博士後期課程

要 旨

人生の夢を叶える方法は、実に多様である。いろいろな道があり、いろいろな職業がある。自分の人生に対して、何らかの目標を立て、いろいろな形で努力する。その生涯をどのように生きるかは、どのように努力し、生きてきたかという過去・現在が深く関わっており、未来の形すら予測できるかもしれない。働き方、学び方、生き方は、人生の重要な位置を占めるが、人によって様々である。その過程で、誰と出会い、どのように学び働き、響き合ったかは、人生を切り拓く道につながっていると思われる。小論は、留学に向けての思い、中日の懸け橋をめざしてのいろいろな挑戦と思いを、「働・学・研」の視点からまとめたものである。

キーワード：働・学・研、環境、生活廃棄物、ごみ問題、中日比較

A way of life challenging learning and studying while working for a bridge between China and Japan

CHENG Yuan Hong

Doctoral Course Student of Management Policy Major
Graduate School of Economics and Business administration
Nagoya Gakuin University

1 はじめに

日本に留学し博士論文に挑戦するなど、高校時代までは思ってもみなかったことである。それが、いろいろな体験や出会いを通して、日本留学が実現した。修士論文さらには博士論文への挑戦につながり、今日に至っている。

日本アニメとは高校時代に出会い、大学時代に傾倒していく中で、日本への興味と思いが強まっていく。そして、日本に留学した2人の兄から受けたインパクトも大きなものがある。名古屋学院大学で博士論文に挑戦し奮闘する彼らの姿に接し、自分も頑張りたいとの思いを次第に募らせていく。

日本での留学生活は、ほぼすべてが未体験ゾーンであった。修士時代は、次兄家族との共同生活のなかで、アルバイトをして学資を稼ぎ、研究時間を見つけていった。アルバイトの経験も、社会勉強の場となる。そして、修士論文をまとめていく中で、研究の奥行きの高さや面白さ、さらに難しさを体感する。

修士論文での手応え、そして博論に向けての次兄の奮闘が、わが背中を押して、博士課程に進学した。博士論文の壁は想定以上に高い。それなりの手応えを感じつつ、五里霧中を突っ走っている。それが、今の状況といえる。

小論は、これまでの歩みをふり返り、中間総括を試みたものである。を通して、自らの研究人生をどう切り拓いていくかを考えてみたい。

2 進学につなげた道

2.1 アニメが点火した日本への思いと努力

私は小さい時、テレビをあまり見なかった。90年代の農村にとって、カラーテレビを持つ

のはお金持ち家庭だ、と言われていた。うちはテレビがあったけれども、黒白テレビだった。その時のアニメは少なかった、親がテレビを見る時間を厳しく監視するなか、見る時間も少なかった。

日本のアニメに触れたのは、高校時代のことである。高校時代は、授業が詰まっているため、日本のアニメは思うように見るができなかった。

大学時代は、自由時間があり、たくさんアニメを見た。多くは日本のアニメで、特に宮崎駿のアニメはほとんど見た。日本の漫画文化は、私の心に深く印象を与えた。

宮崎駿のアニメには、環境問題に深く関わるアニメがいくつかある。地球環境への深い畏敬と関心が、私の心の内に芽生えたと感じている。

日本文化への認知が高まるなか、いつか日本に行くことを夢見ていた。そして大学卒業後、日本語学校で日本語を勉強して日本への留学を準備した。

2.2 日本で博士論文に挑戦する長兄・次兄のインパクト

私が小学校の時、10歳年上の長兄は高校でほとんど学校の寮に住んでいた。1か月毎に家に帰ってくるので、会うことも少なかった。

中学生の時、長兄は日本に留学していた。その時はまだ、日本が家からどれぐらいの距離にあるか知らなかった。ただ家族を離れて比較的遠いところに行って学んでいることを知っていた。高校時代には長兄の生き方が少し気になっていた。外でどのように暮らし、どのようにアルバイトをしながら学校に通うのか。どんな困難に直面しているか、どのように挑戦するかなど、心の中で思いめぐらしていた。

大学時代に、長兄が博士課程に進学した、そ

の時は電話を持っていたし、連絡することが便利になった。たまに連絡し、日本での生活や勉強することを話したり聞いたりした。また中国の大学交流会で、十名先生が講演され、長兄が通訳する姿を見た。彼が会社に勤務しながら、どのように研究し、工夫を重ねていたか。朝勉強して働きを終わってまた勉強を続けていた、1日5時間しか寝ずに最後博論を書き上げたという。

次兄も、長兄に続いた。次兄がそのように努力し出したのは、博士3年半からと思われる。深夜起きて論文を書く。疲れたら休憩、また続ける。授業での迷い、試行錯誤など経て、難関を突破し、最後まで頑張ってつくり上げた。

次兄の奮闘する姿を目の当たりにしたのは、日本に留学してからのことである。その様子を近くでみて、深い感銘を受けた。

2.3 日本留学のスタート

日本留学のきっかけは、大学時代にさかのぼる。地元の一部とくに商店街では生活ごみが道に散乱しており、長い時間、路上放置されている場面をよく見た。毎日清掃員が掃除しても、その状態があまり変わらなかった。どうすれば綺麗な都市に変わるか、先輩からよく聞いた。今の日本の環境はとてもいい。日本は昔の汚染大国から現在世界中に有名な住みやすいところになっている。都市のごみ廃棄物処理問題にどのように取り組み問題を克服したのか。日本の環境保護について、色々な分野を具体的な方面から深く勉強したい。

日本への憧れを胸一杯に抱いた筆者は、2014年3月に私費留学生として、名古屋学院大学留学生別科に入った。ここにわが人生の第2ステージ、異国文化の体験生活が始まる。

3 日本での留学体験

3.1 日本の第一印象—きれいで便利な自然・文化環境

2014年3月21日、日本に到着した。その日のことは、今も覚えている。初めて日本の電車に乗る。新聞や本を読む人が多く、周りは静かで、日本の電車文化が感じられた。道路はとてもきれいで、ごみもないし、周りは緑が広がっている。まるで日本アニメの中の緑あふれる映像のように感じる。

また、日本の学習環境は、非常に便利である。各町区に図書館があり、学習環境は非常に整っている。インターネットで資料を探すことができ、無料利用し、資料を探すのがとても便利である。

人も親切である。日本に来たばかりの頃のことを思い出す。道はまだわからなかったし、スマホもなかった、初めて学校に行って帰る時、地下鉄を降りた後、道に迷ってしまった。紙に書いた住所を頼りに、たどたどしい日本語で道を聞く。すると、おばさんが私を連れて家まで案内してくれた。本当に優しい人だった。

人生の転換点で、こんな良いことに遭遇して、これからの留学生活が待ち遠しく感じられた。

3.2 働きながら大学院に通う

中国の実家は、次兄や私たち兄弟姉妹の留学費を支援ができない。一方、日本では、アルバイトをしながら学校に通うことができる。

そのような状態で、日本ではアルバイトをしながら学校に通う生活を始めた。日本に来る前は、そのような体験をしたことがなかった。

日本に来たばかりの頃は、日本語会話が低く、アルバイトを探すのも大変だった。経験がないので、何回も仕事を探してみた。1か月経っ

て、コンビニで働くことになった。仕事を始めた頃は、業務について何も知らなかった。先輩が少しずつ私に教えてくれて、だんだん仕事に熟練していく。接客の緊張感も次第に緩み、自信を持つようになった。

初めて給料をもらった時はとてもうれしかった。自分で働いて得た給料である。買いたい物、食べたいものがいっぱいあり、つい無駄使いしてしまった。

このような状況は、修士課程2年の時まで続き、論文を書く時間が足りなくなる。このままではダメになってしまう。お金と働く時間の管理は、重要な課題となる。

アルバイトと勉強時間の関係をどうやって配置するかは、とても重要なテーマである。このような管理計画の立案は、研究するのにも役立つと思う。

3.3 修士課程での研究と手応え

2015年4月に名古屋学院大学大学院の修士課程に入って、十名先生の指導を受けた。

十名ゼミでは、先輩たちが自分の論文や資料を発表している。みんなの発表姿や授業での交流など、素晴らしい印象を受けた。ゼミで私以外は、ほぼ博士課程の先輩方である。研究分野は多様で、研究視点も深く広くて、いろいろな視野からアドバイスをいただいた、先生や先輩たちのおかげで、修士論文を何とか仕上げることができた。

3.4 博士論文への挑戦

修士課程を卒業後、博士後期課程に進学した。修士課程で研究した内容を、もっと深く研究したいからである。博士課程では、中日の生活廃棄物処理問題により深く広くメスを入れるべく、研究を続けている。

その研究を通じて、日本の環境問題の厳しさや市民の公衆環境美化意識の高さ、幼児の環境教育、家庭環境教育及び行政、企業など地域連携の強さ、今のきれいな生活生存環境を創造する各分野の努力にあらためて注目している。中国の環境問題を解決する方法として求められるのは、歴史、経済、文化、市民教育など地域環境を担う主体が連携していくことの重要性である。

3.5 博士課程ゼミでの研究交流—先輩たちからの刺激と学び

2018年7月に次兄が博士号をとって帰国し、長兄に続いて大学教員になった。これからは、1人で研究人生を切り拓いていくことになる。

もし自分がこのまま進歩しないと、自分の人生は下がり坂でしかないことに気がついた。博士課程研究の難局にどうやって挑戦すればいいのか。迷ったり、彷徨したりすることもある。母から、「あきらめず頑張って、努力してこそ、自分の運命を変えることができる」という助言・激励も受けている。

ゼミ研究交流の中で先生や先輩たちも多くのアドバイスや助言をいただいた。次兄、桜井さん、富澤さんと続いた博論ドラマは、実に印象深いものがある。彼らの姿に接し、追いかけてやろうとする自分がいる。これから自分でどうやって研究を進めていくか。ゼミで先生や先輩方から何度もアドバイスをいただいて、博論の現段階と今後の課題を知ることができた。

4 おわりに

博士論文の構造をどのように設計するか。各章を、どうやってうまくつなげるか。何が不足しているか、どんな視点を入れるか。アルバイ

トと研究時間のバランス、お金の管理など、課題も尽きない。

いま、研究人生の岐路に立っていると感じている。博論に仕上げていく突破口が見いだせず、悶々としながら彷徨している段階にある。そうした中、ゼミでの先生から貴重なアドバイスや適切なお指導、および太田さんなどゼミの先輩方の助言や応援のおかげで、夜明けの曙光をわずかに感じ始めている。

留学生活そして研究人生において、良師・親友に出会えたのは、大変幸せなことである。十名先生だけでなくゼミの博士の先輩方すべてが、良師である。たくさんのアドバイスや援助、目標をいただいた。私にとって、得るものは限りなく深いものがある。それを力にして、博士論文を仕上げ、「働・学・研」協同の良循環をつくりだしていきたい。

主要研究業績

程遠紅 (2017) 「中国における都市生活ごみの現況と課題—鄭州市と名古屋市の比較をふまえて—」『名古屋学院大学大学院 経済経営論集』第20号。

程遠紅 (2018) 「都市生活ごみ処理の変遷と課題—日本の主要都市と中国との比較をふまえて—」『名古屋学院大学大学院 経済経営論集』第21号。

程遠紅 (2019) 「中国における環境教育と大都市ごみ問題—生活ごみ分別へのアプローチ—」『名古屋学院大学大学院 経済経営論集』第22号。